三省堂英語教育・中学編　別冊　第８号

パタンプラクティス再考
～Back to basics～

東京都港区立御成門中学校
明石達彦

Class to Class Letter
NEW CROWN
授業通信

■はじめに

数年前，私が行った区内の研究授業でのことである。現在完了形Have you ever been to～? の表現を学習し，その定着のためのゲームを行った。生徒たちは，教室内を立ち歩き，積極的に活動していた（様に見えた）。この授業では参観している英語科の先生方に協力してもらい，活動している生徒の発話をチェックし，様子を記録してもらった。そして授業終了後の協議会で，その記録の内容を報告してもらった。

・「Yes，アイ，ハブ，エバー，ビントゥ…京都」といった，日本語的な発音とたどたどしい英語が目立つ。
・誤った英語を話している生徒がいる。
・日本語で答えている生徒が結構いる。

「そんなはずはない。」先生方からの報告は，私の予想に反したものであった。授業ではOral interactionやMim-mem（生徒に教師が言った文を模倣させること）といった手順はきちんと踏んだはずである。私は自分の耳を疑った。実は私はその授業での活発な生徒の様子から，てっきり彼らは，授業中に学んだ英語を立派に話しているものと思いこんでいたのである。そのとき，ずいぶん前に参加した研究会である先生が言っていたことを思い出した。

「ペアワークやクラスワークをさせるときは，生徒たちがその活動で使う表現を暗記するくらいまで練習させた後でないと，うまくいかない」

まったくその通りであった。反復練習している場面で生徒が不完全な英語を言うということは，誤りが固定することを意味する。私は自分の指導の甘さを反省した。そして生徒に英語を言わせることの難しさを痛感した。この日を境に，「生徒にしっかりとした英語を言わせることは，そう容易なことではない」という意識が自分のなかに芽生えた。また，それを補うための何かよい口頭練習はないかと模索し始めた。

■パタンプラクティスとの出会い

パタンプラクティスという言葉は以前から何度も聞いたことがあったが，私の頭の中には「良いイメージ」というよりも，なんとなく「悪いイメージ」があった。それは「機械的」とか「意味がない(meaningless)」というものである。コミュニカティブな授業をするためには，まったく必要のない存在であるとすら思っていたのである。しかし，私がその後参加したELEC同友会英語教育研究大会で聞いた１本のカセットテープが私のパタンプラクティスに対するイメージを全く変えてしまった。このテープは30年以上前の1965年に録音されたもので，茨城県水海道中学校の荒井照江教諭による，パタンプラクティスの口頭練習の様子が記録されていた。まるで機関銃のように浴びせかけられる教師のキュー（合図）に，生徒は実に大きな声で，正確に，しかも驚くべきスピードで英語を発していく。その生徒の英語のすさまじさに，私は圧倒されてしまった。「…すごい！」おそらくあの場所にいたほとんどの教師がそう思ったに違いない。30年前にあんな授業が行われていたなんて，しかもあの生徒の反応の速さ，声の大きさ。私は驚きと同時に，短時間で多量の口頭練習ができる本物のパタンプラクティスのすごさを知った。

■パタンプラクティスとは

パタンプラクティスはミシガン大学のC.C. Fries教授の提唱した外国語教育法Oral Approachの中心的な英語指導技術である。これはもともとは，ラテン・アメリカからの留学生を僅か８

週間の間に，大学で勉強できるだけの英語の実力をつけさせることを目的とした指導技術である。この指導技術は日本には昭和29年ごろ紹介され，山家保氏が中心となり，日本の生徒の実情に合うように改良され，実践された。というのも，ミシガン大学での実践は，ある程度英語ができる，あるいは英語がしゃべれなければならないといった必要感に迫られた人々を対象にしていたという点において，日本の英語教育とは条件が違っていたからである。昭和30～40年代は日本の中学校では盛んに行われていたが，その後だんだんとその火は消えていってしまった。

パタンプラクティスという言葉は，今はほとんど聞かれなくなった。しかし，それは本当になくなってしまったのだろうか。下の問題例を見ていただきたい。これは現行版*NEW CROWN*から抜粋したものである。これを見る限り，内容は目的語を入れかえるドリルであり，まさにパタンプラクティスそのものである。このような形態のドリルは教科書の随所に見られる。つまり，パタンプラクティスの考え方は今でも形を変えて教科書の中に生きているのである。

りんご，メロン，オレンジの絵を用意し，友だちがどのくだものの絵を持っているか，あててみよう。

（例） A : Do you have an apple?
B : Yes, I do.
[No, I don't. I don't have an apple.
I have a melon.]

（*NEW CROWN*，**1年，30ページより**）

■パタンプラクティスの実際

(1)　その技術と実践

パタンプラクティスの代表的な技術としては，次の３つがある。（　）内は教師の言うキューである。

a) Substitution

基本文　I like apples.
(Oranges)　I like oranges.
(Tomは)　Tom likes oranges.

b) Conversion

基本文　I like apples.
(Question)　Do you like apples?
(Yes)　Yes, I do. I like apples.
(No)　No, I don't. I don't like apples.

c) Expansion

基本文　I like apples.
(Very much)　I like apples very much.

a)のsubstitutionは基本文のある１部分に違う語を代入する方法である。b)のconversionは平叙文を疑問文，否定文などに転換させるもの，c)のexpansionは修飾語を付加して行くやりかたである。実際にはこれらの３つのバリエーションをミックスした形で行うのが普通である。そして，生徒と教師の約束事として，教師が(Class)と言ったならばクラス全員がリピートすること，(Question)といったならば疑問文にすること，(Yes)(No)はそれぞれ答えの文にすることが決めてある。次の例は最近私が１年生の授業で行ったものである。

基本文	I like baseball.
(You)	You like baseball.
(Tom)	Tom likes baseball.
(Basketball)	Tom likes basketball.
(Play)	Tom plays basketball.
(Very well)	Tom plays basketball very well.
(Question)	Does Tom play basketball very well?
(Yes)	Yes, he does.
	He plays basketball very well.
(No)	No, he doesn't.
	He doesn't play basketball very well.

手順を追って見てみよう。まずこのパタンプラクティスを行うに当たっては，すでに三単現とその疑問文および答え方が導入済みであることを前提とする。教師が基本文であるI like baseball.を２回リピートする。次に教師が(You)とキューを出し，即座に生徒を指名する。その生徒がすぐYou like baseball.と言えれば教師は(Class)といって，クラス全員がYou like baseball.とコーラスする。もし生徒の答えが間違っていたり，答えられなかった場合は，教師が正解を言い，それをその生徒にもう１度答えさせてから，全体にコーラスさせる（違う生徒をもう１

人指名して答えさせてもよい)。次に(Tom)と教師がキューを出し，以下同じ手順で進めていく。最初はスピードも遅く間違える生徒が多いが，２回目はかなりスピードアップできる。私はこの程度の量のパタンプラクティスを１分以内でできることを目標としている。

(2)　生徒の反応

この活動が生徒から見てどうなのか簡単なアンケート調査をしてみた。次の数字は現在教えている１年生２クラス62名を対象にして行ったものである。パタンプラクティスを始めてから約２ヶ月後，時期は11月である。

この活動は…
1）英語の学習に役に立つか
立つ　34　　普通　25　　立たない　3
2）この活動は難しいか
難しい　33　普通　23　　難しくない　6
3）この活動は緊張するか
する　31　　普通　23　　しない　8
生徒の感想の中で多いのは…
- **いきなり当てられるのですごく緊張する**
- **他の人が答えているときはわかるけど，自分に当たると緊張して答えられなくなる**
- **頭の中ではわかっているけど，なかなか口から出ない**

■パタンプラクティスの利点

(1)　Time-saving way

パタンプラクティスの魅力は，短時間で多くの英語を生徒に言わせることができる点である。先ほど示した私の例では，１分間に７名の生徒を個人指名でき，クラスの全員が少なくとも８つの英文を口にしているのである。５分間では，ほぼクラス全員を指名することができ，しかも平叙文，疑問文，否定文，答えの文などを入れることができる。このようにパタンプラクティスでは，短い時間で多くのバリエーションを口頭で生徒に言わせることができるのである。すなわち，口頭練習としてかなり効率の良い技術であるといえる。

(2)　文法の暗記よりも

人称代名詞を教える際によく教えるのが，I - my - me - mineのような覚え方である。生徒はこれを暗記するために努力する。これを覚えさせることの是非は別としても，英語を運用するという意味において，この呪文を暗記することだけで生徒がすぐにThis is her book. やHe likes me. などの正確な人称代名詞が使用できるとは思えない。むしろパタンプラクティスを使って次のように指導することが必要ではなかろうか。

基本文	I know Tom.
(You**は**)	You know Tom.
(**彼を**)	You know <u>him</u>.
(Kumi**を**)	You know <u>Kumi</u>.
(**彼女を**)	You know <u>her</u>.
(Tom**と**Kumi**を**)	You know <u>Tom and Kumi</u>.
(**彼らを**)	You know <u>them</u>.

また少し高度になるが，次のような練習ができるのもパタンプラクティスの利点である。

基本文	Tom watched his dog.
(He)	He watched <u>his</u> dog.
(Nancy)	Nancy watched <u>her</u> dog.
(You)	You watched <u>your</u> dog.

このような練習を繰り返すことによって，生徒にとって覚えにくい人称代名詞をより運用に近づけた形で指導することができる。

■パタンプラクティスの活用

パタンプラクティスは，文構造の習慣形成を目指す機械的な練習であり，生徒の言う英文には，生徒の考えやメッセージは含まれない。その意味で，コミュニカティブな活動ではない。したがって，この活動が50分の授業の中で中心的な活動となることはないし，またそうであってはならない。それでは，授業の中で，どのような場面で，何を目的に行えばよいのであろうか。私は次のように考えている。(【　】は期待している効果である。)

ア）新しい文型を学習した後でその応用として
→疑問文や否定文を混ぜたかたちで【１時間の中で，疑問文，否定文を導入・練習できる】
イ）過去に学習した文法事項の復習として

→３年生に先ほどの人称代名詞の口頭練習をさせてみたらどうか【滑らかに口頭で言えるだろうか】

ウ）ペア（クラス）ワークをする前に

→そこで使う文型を集中的に練習してから活動させてみたらどうか【生徒の発話が滑らかに，正確になるのではないか】

エ）チャットなどの即興的なスピーキング活動をやらせる前に

→質問と答えのバリエーションなどを復習してから活動させてみたらどうか【生徒の発話に変化が見られるのではないか】

ア～エはいずれも，コミュニカティブな活動を行う前段階の口頭練習としての役目を負っている。むろんすべてを試したわけではない。特にイやエはこれからやってみようと思っているものである。生徒の発話や生徒のコミュニケーション能力を育てる上でどんな影響があるのか，大変興味深い。

■パタンプラクティスの留意点

パタンプラクティスを行う際に気をつけるべき点をあげてみたい。

①　スピーディーに行う

１分間で７～８の文を最初は個人で，次に全員のコーラスで言わせることを目標とする。すなわち１分間で最高８種類16回の生徒の英語を聞くことになる。スピードと緊張感は不可欠である。

②　生徒はランダムに指名する

次に誰が指名されるかがわかっていると，指名される生徒以外は安心してしまう。自分がいつ指名されるかわからないという緊張感が大切である。

③　生徒の答えが違っていたら

生徒が答えられなかったり，答えが誤りであったときには即座に教師が正解を言い，その生徒にすぐにリピートさせる。

④　絵やチャート等を有効に利用する

絵やチャートがある場合は多いに利用したい。また，デジタルカメラの映像をテレビに映し，次々と画面を切り替えていくのは作業効率がよく，絵を作るよりずっと簡単である。

⑤　１回の練習は５分以内で終える

パタンプラクティスは生徒に緊張感と疲労感を与える。その緊張感が授業の良いアクセントになる場合がある。しかし，中学生の場合，５分程度が限界である。

⑥　キューの出し方に配慮する

Tom is a tall boy. という基本文に対して，教師が(Jane)というキューを出すと，Jane is a tall boy. となり，変な英語になってしまう。

■パタンプラクティスの限界と今後

実は私も中学校時代はパタンプラクティスを教わった一人である。当時の*NEW CROWN*の教科書には，巻末にピクチャーチャートがしっかりと折り込まれていて，その折り目がボロボロになるまで練習した（させられた）覚えがある。しかし，今思い返して見ても，私がパタンプラクティスのおかげで英語が得意になったとは思えないし，そのおかげで英語教師になったとも思えない。

山家保氏が『新しい英語教育』〔(財)英語教育協議会，1963年〕で「パタンプラクティスは誠に能率的・効果的な指導法ではあるけれども，これは万能ではない。パタンプラクティスで練習したものは，実際の場面で使うことで補充していかなければならない。」と述べている。このようにパタンプラクティスはあくまでも文型の練習であって，最も大切なのは，その次に行われるコミュニケーション活動であるということだ。

2002年から実施される英語の週３時間体制という新しい枠組みの中で，30年前にこぼれ落ちてしまったこの視点を再認識し，パタンプラクティスを非常に効率のよい基礎・基本のための練習として見直す提案をしてゆきたい。

ELEC同友会(オーラルアプローチ研究部会):
パタンプラクティスを中心とするオーラルアプローチに関する研究をしている団体です。毎年11月下旬から12月上旬に研究大会を東京で行っています。
お問い合わせは電子メールで
t-akashi@bea.hi-ho.ne.jp **明石達彦まで。**

◇三省堂英語教育・中学 別冊　◆2001年2月15日発行　◆編集・発行人　渡辺孝映
◆発行所 株式会社 三省堂　◆〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14　◆電話03(3230)9421
◆電子メール newcrown@sanseido-publ.co.jp　◆ホームページ http://www.sanseido-publ.co.jp/